

生産にかかわる在来の知識と技術



巻頭言

栗本英世*

Indigenous knowledge and technology concerning production

Key Words : indigenous knowledge and technology, South Sudan, resilience

私のようなアフリカでフィールドワークを実践してきた人類学者にとっても、「生産にかかわる知識と技術」は重要な研究テーマだ。資本主義・貨幣・市場にどっぷりと浸かって生活している現代日本の私たちは、必要なモノのほとんどすべてを貨幣と交換で手に入れる。それらのモノは、工業的・商業的に生産されている。こうした社会では、生産にかかわる知識と技術は、さまざまな分野に細分化されて、一部の人が所有している。それに対して、私が調査してきた南スーダンでは、現在でも多数の人びとは、生存に必要な食糧は自分で生産し、生活に必要な道具は手仕事で作っている。柱にする材木、屋根を葺く草、壁にする粘土といった家の建築材料も自分で採取し、自分で建てる。食糧は、農耕、牧畜、狩猟、漁撈、および食用になる野生植物や昆虫の採集によって獲得する。社会のなかで、生産にかかわる知識と技術は、特定の個人や階層に偏在しているのではなく、広く共有されている。

農耕、牧畜、狩猟、漁撈、採集の五本柱のうち、厳密に「食糧生産」と呼べるのは、農耕と牧畜だけだ。あとの狩猟・漁撈・採集は、生産ではなく食糧獲得の手段であるが、ここでは広い意味の生産に含めておこう。私はこの食糧生産・獲得のシステムを「多元的生業」と呼んでいる。

もちろん、南スーダンにも貨幣は流通しており、

商店や市場^{いちば}はある。私が長年付き合っている村人たちも、衣服、塩、農具や斧、槍やナイフなどの鉄製品、プラスチックの容器、アルミ製の鍋などは貨幣で購入している。ただし、店や市場は村から数十キロメートル離れた町にしかない。私がフィールドワークを始めた1970年代末だと、プラスチック容器やアルミ製の鍋はまだほとんど出回っておらず、自分で作ったヒョウタンの器や土器の壺が使用されていた。

さて、南スーダンにおける生産にかかわる知識は、村人たちの生活の場であるサバンナ平原、山地、川や沼といった自然環境と深く結びついている。言い換えれば、彼らは野生の植物や動物、場所による微妙な環境の変異、雨季と乾季による環境の周期的変化について、膨大で細やかな、そして実用的な知識を身に付けている。こうした知識は世代を超えて伝承されてきたもので、子どもたちは生産活動に参加するなかで、あるいは遊びのなかで、自然に身に付けてゆく。それに対して、生産にかかわる技術は素朴で単純なものである。農耕は天水に依存しており、灌漑や施肥は行われない。農具の種類も少ない。主食であるソルガム（モロコシ）の脱穀は、木の棒で叩くという方法で行われる。狩猟の道具は、近年は内戦の影響で普及した自動小銃が用いられるようになったが、かつては投げ槍だけであった。牛と山羊・羊を飼養する牧畜にかかわる主要な技術は、オスの去勢、乳の出る母牛と子牛の分離、搾乳と乳の加工などである。生乳は酸乳とバターに加工されるが、チーズは作られていない。

多元的生業の土地生産性と人口支持力は低い。この地域の人口密度は、1平方キロメートルあたり10数人程度にすぎない。しかし、多元的生業を支えている生産にかかわる知識と技術は、以下の二つのおおきな利点を有している。ひとつは、天災と人災に



* Eisei KURIMOTO

1957年1月生
京都大学大学院文学研究科博士課程修了
(1985年)
現在、大阪大学大学院人間科学研究科
研究科長／教授 修士(文学)
社会人類学、アフリカ研究
TEL : 06-6879-8000
FAX : 06-6879-8085
E-mail : kurimoto@hus.osaka-u.ac.jp

対する強さである。南スーダンの自然は、人間に対して優しくない側面があり、数年に一度の周期で旱魃、洪水や病虫害に見舞われる。また、この地域は19世紀中期から現在に至るまで断続的に軍隊や武装集団による掠奪や破壊を経験してきた。穀物や家畜が掠奪され、村が焼き討ちされるといった惨事を繰り返し経験してきた。人びとの生活の安全を保障してくれる政府が弱体であり、それどころかしばしば政府が人びとに敵対的である状況のなかで、彼らが生き延びてこれたのは、生産にかかわる知識と技術のおかげである。つまり、農耕が失敗し、穀物が不十分な状況で、加えて家畜を失い、村を捨てて原野に避難することになっても、狩猟・漁撈と採集に依存して生き延びることが可能なのだ。南スーダンの社会のレジリエンスの強さを支えているのは、生産にかかわる知識と技術であるといつてよい。

ふたつめに、彼らの多元的生業は、持続可能性が高いと考えられる。考古学的証拠が示すところでは、この地域では2,000年以上前に現在とほぼ同じ生業形態が成立していたと考えられる。つまり、多元的生業は、長い歴史を有している。それは、自然環境に適応しており、持続可能であることを意味している。

ところで、こうした利点を持つ南スーダンの生産にかかわる知識と技術は、現在衰退の危機に直面している。その要因はふたつある。第一は、内戦のインパクトである。2005年まで22年間続いたスーダン内戦と、2011年に独立した新国家南スーダンが2013年末以降に陥った内戦状態の結果、数百万人の人びとが難民や国内避難民になった。このなかに

は、生産にかかわる知識と技術を継承する機会を失った、多数の若者たちがいる。彼らは村に戻ったとしても生活していくのが困難である。他方で、難民や国内避難民にはならず居残った人びとと、一部の帰還民（元難民・国内避難民）から構成されている地域社会は、人口的に「過疎状態」にあり、生産する力が低下している。

第二に、政府、国連機関と国際NGOが実施してきた戦後復興、平和構築と開発の政策のなかで、伝承されてきた生産にかかわる知識と技術は、評価すべきものとはまったくみなされておらず、より「進歩」したのものにとって代られるべき「遅れた」と位置付けられていることがある。たとえば、進んだ農業の象徴は、アメリカの援助機関が推進していた、化学肥料の配給とトラクターの提供などとセットになった、遺伝子操作を行ったトウモロコシ栽培の普及である。

遺伝子操作を行ったトウモロコシは、在来の農法と比べると、単位面積あたりの収量は驚くほど多い。しかし、持続可能性には疑問が呈されており、数年後には栽培農家が借金まみれになる危険がある。また、こうした「進歩」した穀物と農法が普及すると、多様な品種がある、モロコシ、トウジンビエ、シコクビエなどの在来穀物や混作される豆類などの栽培が衰退し、遺伝的多様性の減少につながる事が予想される。

開発の政策決定者だけでなく、人びと自身も、生産にかかわる、在来の伝統的な知識と技術を、正當に評価すべきだろう。それは、南スーダンの戦後復興と平和構築の基盤となるべきものである。

